

韓国系キリスト教会の「弟子訓練」についての 批判的考察

川 島 堅 二

Critical Study on the Discipleship Training at South Korean Christian Churches in Japan

Kenji Kawashima

Abstract

Regarding South Korean Christian Churches in Japan, their methods of missionary work have attracted attention, and “discipleship training” has been cited/praised as a reason why these churches have enjoyed great influence in Japan. But there are also fears that training may be a reason for cultlike appearance of these churches. In this paper, by making a comparative analysis of the “discipleship training” texts of two South Korean Christian Churches, Sarang and Yohan Church, I would like to show clearly what elements of “discipleship training” contribute to the cultlike appearance of these churches.

Keywords: Nevius Plan, Yohan Church, Sarang Church, discipleship training, cult

キーワード：ネヴィアス方式，ヨハン教会，サラン教会，弟子訓練，カルト

1. はじめに

昨年末に北海道大学出版会から刊行された『越境する日韓宗教文化－韓国の日系新宗教・日本の韓流キリスト教』（李元範・櫻井義秀編著）は、20年以上にわたる日韓の宗教社会学者による共同研究の成果であり、そこにおいてたとえば創価学会のような日本の新宗教が韓国の新宗教の最大勢力であるという事実や、現在の日本のキリス

ト教界に多大な影響を与えている新宗教と福音派・聖霊派による宣教が韓国からもたらされているという事実を、実地調査に基づき、その内実に迫りながら「文化交流の恵みと葛藤」として明らかにしている。

さらに、韓国系キリスト教会については、それが日本において勢力を伸張できた一因として「弟子訓練」という「宣教のメソッド」に着目、「韓国系キリスト教会が成長するのは弟子訓練という宣教のメソッドを持っているからであり、ヨハン教会、サラン教会、ヨイド純福音教会、KCCC（Korean Campus Crusade for Christ）等の韓国キリスト教会の強みはそこにある。教職者のみが宣教を行う日本のキリスト教各教派との教勢が異なるのは当然なのである」と評価する一方で、このメソッドが「訓練するもの－訓練されるものという役割構造や権威主義」を生み出すことにより「教会のカルト化」の一因にもなっていると指摘している¹⁾。ただ本書においては、この「教会のカルト化」についての分析は主に聖神中央教会の元主管牧師金保の説教やセミナーにおける講演に基く分析であり²⁾、「弟子訓練」のテキスト内容の批判的分析はなされていない。

そこで、この論文においては、教会形成に「弟子訓練」を採用している二つの韓国系キリスト教会、サラン教会とヨハン教会の「弟子訓練」テキストの比較分析を行うことにより、「弟子訓練」の中のどのような要素が「教会のカルト化」の一因になるのかを明らかにしてみたい。

2. 「弟子訓練」の淵源としてのネヴィアス方式（Nevius Plan）について

韓国系教会が採用している「弟子訓練」の歴史的由来は、19世紀末に東アジアの伝道を行った西欧の宣教師たちが採用した「ネヴィアス方式」と呼ばれる宣教方法であるとされる³⁾。そこで、この方法が採用される歴史、とくに日本と韓国におけるプロテスタント・キリスト教宣教初期の状況を記述することから始めたい。

日本におけるプロテスタント・キリスト教元年は、1858年アメリカを筆頭に結ばれた「安政五カ国条約」に基づき、アメリカ長老派系の宣教師 J. C. ヘボン、S. R. ブラウン他が来日した1859年とされるが、1872年（明治5年）に日本基督公会が設立されるまでの13年間に信者となった者は、長崎で5名、横浜で6名の計11名に過ぎなかった⁴⁾。

それに対して韓国のプロテスタント元年とされるのは1884年ないし1885年だが、10年目の1894年にはすでに108名の信者が記録され、さらにその後、宣教開始12年目から24年目に当たる1897～1909年までの12年間に「ミッションの名簿に残る信徒数は530名から26,057名に達して」いる。他方、隅谷三喜男によれば、日本では宣教20余

年目の1880年（明治13年）、信徒数は3,000名弱に過ぎない⁵⁾。

こうした韓国におけるキリスト教隆盛の背景には、日露戦争（1904～05年）や日本による保護国化（1905年）、その他の歴史的要因などの外的影響が考えられるが、キリスト教内の要因として、「独立抗日運動とキリスト教の一体化」「大リバイバル運動の勃発」そして主に宣教師による「賢明な宣教方法」すなわち「ネヴィアス方式」があると常石は指摘する⁶⁾。

「ネヴィアス方式」とは、アメリカ長老派系の宣教師たちが中心になって決めた1890年以降の韓国におけるキリスト教宣教の基本方針の総称だが、その起こりは1890年6月に、当時、中国で宣教活動をしていたネヴィアス夫妻が、ソウルに招かれ2週間にわたって「韓国における今後の宣教政策」を主題に講演したことで、その間の討議内容を「原ネヴィアス討議」という。しかし、これは資料としては残されておらず、今日一般に「ネヴィアス方式」と称されるものは、このときの討議をもとに、後日、アンダーウッドやクラークら韓国で活動した宣教師がまとめた文書や、長老教会が公の会議で採択した決議文に対して付けられた名称である⁷⁾。

「ネヴィアス方式」の特徴は、聖書中心主義、自主伝道（Self-Propagation）、自立運営（Self-Government）、自給運営（Self-Support）の4点とされるが、アンダーウッドによれば、その効果は次の2点にまとめられる⁸⁾。

- (1) 韓国で活動する宣教師が一致してこの方式を用いたことによる協力体制の確立
- (2) 伝道・教会建設・教会の経済的政治的運営を当初から韓国人に任せ、宣教師や宣教本部が安易に金銭や人員の補充をしなかったことによる教会の自主自立の確立

しかしながら、今日の韓国系キリスト教会の宣教メソッドである「弟子訓練」との関わりで考える時に重要になる「ネヴィアス方式」の特徴は、自らが教会を建設、運営し、伝道や信徒指導の主体ともなる信徒の養成である。常石はこれを「信徒牧師」と呼び、このような信徒概念に基づく教会形成が、韓国では宣教開始当初から宣教師たちによってなされていたという⁹⁾。

したがって、今日、日本人キリスト者がしばしば口にする「韓国のクリスチャンは実に熱心だ」という言葉について常石は、日韓両国のキリスト教徒の差は、「熱心か不熱心か」という程度の差ではなく、「そもそも信徒とは何か」という信徒概念の差に根ざしているという¹⁰⁾。さらに日本語の「聖書研究会」にあたる「査経会」という組織が、当時の韓国教会にあったが、これは単に聖書の勉強会ではなく、「信徒牧師」の養成機関であったという。歴史的にも、アンダーウッドが初めて「査経会」を始めた1890年、「査経会教育過程に関する原則案」を宣教本部が定めた1891年は、ネヴィ

アス夫妻の訪韓の年と一致しているからである¹¹⁾。

後述するように、今日の韓国系キリスト教会で行われている「弟子訓練」において、一般信者と訓練された「弟子」の違いは、一般信者が、礼拝に参列し、献金を捧げ、また食前や就寝前などに祈りをするなどのライフスタイルとしての信仰生活は実践しても、伝道は牧師や宣教師の仕事であるとして、自ら積極的な関与はしないのに対し、「弟子」は、礼拝・献金・祈りの生活に加え、自ら伝道して新たな信者を生み出すとされていること、よって「弟子訓練」を実施している教会の一部では、この訓練によって養成される「弟子」を「小牧者」と呼んでいることなどからわかるように、「ネヴィアス方式」の「信徒牧師」という理念とその実現機関である「査経会」が、今日の「弟子訓練」の淵源であることは明らかであろう。

3. サラン教会とヨハン教会の「弟子訓練」

「弟子訓練」についての批判的考察を主題とするこの報告において、サラン教会とヨハン教会の事例を俎上に乗せる理由を述べておきたい。

まずサラン教会であるが、この教会の開拓者である牧師・玉漢欽（オクハンフム）が、かつての「ネヴィアス方式」が目指した「信徒牧師」の養成を「弟子訓練」として現代によみがえらせた立役者であることは論を待たない。1980年代以降、日本において「弟子訓練」を実践することで教勢を伸ばしている韓国系のキリスト教会はほぼ例外なく玉漢欽が1984年に著した弟子訓練のテキスト『信徒を目覚めさせよう』¹²⁾を用いている。したがって、今日の韓国系教会による「弟子訓練」のスタンダードとして、これを取り上げる。

次にヨハン教会であるが、この教会の創設者である牧師・金圭東（キムギョドン）によれば、1988年に淀橋教会韓国部（現ヨハン東京キリスト教会）を設立した翌年から13年間は玉漢欽のテキストを用いて「弟子訓練」を行ってきたが、「教会の現状に合うように修正、補完せねばならない部分が少しずつ出てきた」ため、2002年、ヨハン教会自前のテキスト『ヨハン早稲田キリスト教会弟子訓練教材12の門』（「基礎」「養育」「訓練」の三分冊）を刊行、以後はこれに基づいた「弟子訓練」を行っているという¹³⁾。

このヨハン教会については、「韓国キリスト教の日本宣教において注目すべき教会」、その創設者金圭東は「韓国キリスト教の日本宣教に貢献した重要人物の1人」として、彼の信仰と教会活動に関する記事が10回にわたって『国民日報』に掲載されるなど高く評価される¹⁴⁾一方で、大学キャンパスにおける「正体を隠した勧誘」「強引な勧誘」などが問題視され、全国霊感商法被害弁護士連絡会主催の全国集会や

日本脱カルト協会等でも議論の対象になってきた団体である。

したがって、「弟子訓練」という宣教メソッドが教会の教勢伸張をもたらす一方で、「教会のカルト化」の一因にもなっているという冒頭で述べた主張の根拠を、これら二つの教会の「弟子訓練」テキストを比較検討することによって明らかにできるのではないかと考えるのである。

4. 「弟子訓練」テキストの比較分析

(1) 玉漢欽『信徒を目覚めさせよう』（サラン教会）

このテキストでは「はじめに」の部分で、「弟子訓練」の聖書の根拠と、「弟子」とは何かという定義、そして、その弟子を育成する環境・組織の形が提示される。すなわち、「弟子訓練」の聖書の根拠としてマタイ福音書28：18－20「…すべての民をわたしの弟子としなさい…」が示され、「イエスは、漠然と伝道しなさいとは言われず、弟子をつくりなさいと言われた」。「弟子訓練は少数を精鋭化し、その少数をもって多数を動かしていく戦略です」という¹⁵⁾。つまり「弟子」が、訓練を受けていない大多数の一般信徒をリードする精鋭化された少数信徒、「信徒牧師」「小牧者」であることが示される。さらに、そのような「弟子訓練」は、「教職者によって小グループという特殊な環境を通して」なされること、これは「イエスが私たちに見せて下さった手本であり、指導指針」であるといわれる。「弟子訓練」のキーワードは、「少数の精鋭」（小牧者）であり、「小グループ」という組織体制である。

以上のようなキーワードが、テキスト全体の中にどのように配置されているかを見てみよう。

サラン教会のテキストは、AからEの5つの単元で構成されているが、主題別に見ると単元Dは4つに、単元Eは2つに、さらに分けることができるので、実質9つの部分で構成されている。上記「弟子訓練」のキーワードに直接関わる単元は、A「弟子訓練の基礎」とD-c「弟子の資格」、そしてE-a「小グループの集いとリーダーシップ」である。前二者が「少数の精鋭」という弟子の内容定義、最後がそのような弟子を育成する組織論である。これら「弟子訓練」論が、テキストのはじめと中間、そして終わりに近い部分にとバランスよく配置されているのだが、後述するヨハン教会のテキストとの比較のために、ここで指摘しておきたい点がひとつある。それは、全体に占める「弟子訓練」論の割合である。サラン教会のテキスト364頁中、分量が最も多いのは「救いの真理」と題された単元Bで、これは聖書論、キリスト論、義認と聖化といった教理の中核を教示する箇所、83頁（全体の23%）である。次が単元C「信仰人格と生活」でキリスト教的生活倫理を主題としている（73頁、20%）。

その次が「聖書の主題と内容」と題された単元 E-b である (61頁, 17%)。これらは、伝統的な神学教育における教義学、倫理学、聖書知識 (Bibelkunde) に相当し、全体の 6 割を占めている。それに対して「弟子訓練」を主題とする 3 つの単元は、3 つを合わせても全体の 2 割に過ぎない。つまり、サラン教会のテキストにおいては、とくに「弟子訓練」を前提としない保守的な伝統的教派の神学教育のカリキュラム枠組みを踏襲しながら、要所に「弟子訓練」論を配置しているという構造になっていることがわかる。

(2) 金圭東『12の門』(ヨハン教会)

ヨハン教会の金圭東も「弟子訓練」における「少数の精鋭」という弟子の定義と、「小グループ」という弟子育成の組織論は、サラン教会の理念と方法をそのまま踏襲している。そして、「弟子訓練」論を、要所要所(「第3の門」「第7の門」「第12の門」)に配置している構造も類似している。ただいくつかの点で、サラン教会のテキストにはない展開が認められる。

まず「弟子訓練」の聖書的根拠として、マタイ福音書28:18-20とともに、第2テモテ2:2「多くの証人の前でわたしから聞いたことを、ほかの人々にも教えることのできる忠実な人たちにゆだねなさい」が導入される¹⁶⁾。これにより大多数の一般信徒をリードする「少数の精鋭」としての「弟子」、すなわち「弟子」の牧会(司牧)能力に加えて、「ほかの人々にも教える」能力、すなわち、「伝道」「宣教」の側面が強調されることになる。

次に、上記「弟子訓練」論(ただしヨハン教会のテキストでは「指導者訓練」)の文脈で必ず登場するキーワード「乘法繁殖」「乘法倍加」である。金圭東によれば、伝道には「加法倍加」と「乘法倍加」がある。

「あなたが直接人々をキリストに導くことは霊的加法方式です。あなたが新しいクリスチャンをよく訓練させ、弟子としてつくりあげ、それによって彼らがまた他の弟子をつくるようにすることは霊的乘法方式です。」¹⁷⁾

「私たちの育成の目標は育成されたものとして霊的乘法繁殖を通じた至上命令を達成するよう手助けすること」¹⁸⁾

「乘法倍加の働きは指導者が伝道し、弟子にして派遣すること」¹⁹⁾

「乘法方式なくして世界の福音化は達成されず、乘法方式が指導する能力を持った可能性のある乘法方式でなければ、世界の福音化は起こりません。」²⁰⁾

「乘法倍加なく、弟子化筈の目標は成就しません。」²¹⁾

「(加法倍加方法では福音が) 世界に至るまで10,958年かかります。…乘法倍加方法を使えば、一人の個人から始まって20年以内には世界全体が(ただ福音を聞くだけではなく) 完全に弟子化されるでしょう」²²⁾

これらの引用文だけでは「10,958年」とか「20年以内」といった数字の根拠までは理解できないとしても、ヨハン教会の「弟子訓練」において「乘法方式」が決定的に重要であることは明白であろう。そして、これら伝道の二つの方式(加法と乘法)の違いについては、同じ韓国系の教会で、ヨハン教会とほぼ同時期に日本において「弟子訓練」を実践していた国際福音キリスト教会の創立者卞在昌の以下の説明がわかり易い²³⁾。

「もし私が発奮して毎日一人ずつキリストに導いたとすると、16年後には何と(365×16=) 5,840名もの魂を救いに導くことができます。」(加法倍加方式)

「ところが、私が弟子訓練を始めて六カ月後にやっと一人の人を伝道して、その人を他の人を育てることのできる弟子として訓練することができたとしたら、半年後には私も入れてまだ二人の弟子しか生み出すことはできないでしょう。しかし、この二人が外に出て行って次の六カ月にはさらに二人を導いて訓練したとしたら、1年後には4名(倍加)の弟子が誕生していることになります。…時間が経つにつれてこの倍加現象は次のような結果をもたらすことになります。1年後=4名の弟子、2年後=16名の弟子…6年後=4,096名の弟子、そして6年半後には、実に8,192名の弟子となり…さらに16年後には驚くべきことに…40億を超える弟子を生むことになるのです。驚いてはいけません。これは現在の全世界の人口(1970年代当時－著者)に匹敵する数です。」

このような「乘法倍加」の宣教論はサラン教会の「弟子訓練」には認められない要素である。

サラン教会と異なる第三の要素として、テキスト全体に対して「弟子訓練」論が占める割合に注目したい。先述したように、サラン教会のテキストでは、教義、倫理、聖書知識といった伝統的な神学教育の枠組みを踏襲しつつ、その合間に「弟子訓練」論を挿入していくという構成をとっていた。ヨハン教会のテキストでは、それが完全に逆転している。「弟子訓練」論が全体の枠組みとなり、その合間に教義や倫理的主題が挿入されるという構成になっているからである。すなわち、12の単元の内、最も分量の多いのが「指導者訓練：弟子化筈」を主題とする「第12の門」で、68頁、全体

の20%を占める。次が、「指導者訓練：個人伝道」を主題とする「第3の門」、30頁（全体の11%）である。同じく「指導者訓練」を主題とする「第7の門」を合わせると、「弟子訓練」論が全体に占める割合は4割近くになる。（サラン教会では2割）

さらに、単元の分量で上位を占める「第3の門」と「第12の門」の内容構成も注目値する。この二つの単元だけが、「講義1～5」と「討議1～5」という二部構成になっていることである。個人伝道の方法論としての「乗法繁殖」を教え込む「第3の門」と、「乗法倍加」の組織論を教え込む「第12の門」は、「講義」と「討議」により入念に時間をかけて教示されていることが分かるのである。

その他としては、サラン教会のテキストでは「信仰人格と生活」というキリスト教倫理を扱う単元の一項目として扱われていた「従う生活」（6頁）や「管理人の務め」（7頁）が、ヨハン教会のテキストでは、それぞれ「従順」（第9の門・20頁）、「キリストと管理職」（第10の門・20頁）として独立した単元として各々およそ3倍の分量が充てられていること、それとは対象的に聖書知識の部分が縮小されていること（サラン教会E-b「聖書の主題と内容」61頁、ヨハン教会「第11の門・聖書概論」21頁）も、サラン教会との比較におけるヨハン教会の「弟子訓練」の特徴を示していると思われる。

以上述べた両教会の「弟子訓練」テキストの異同を一覧にすると以下のようになる。

サラン教会				ヨハン教会			
	主題	内容	頁数 (%)		主題	内容	頁数 (%)
A	弟子訓練の基礎	証し、黙想、祈り	24	序	イエス・キリスト	キリスト論	35 (10%)
B	救いの真理	聖書論、キリスト論、義認と聖化	83 (23%)	第1の門	クリスチャンの始まり	実践的キリスト論	24
C	信仰人格と生活	服従・奉仕・証し	73 (20%)	第2の門	クリスチャンの人生	キリスト教的生	21
D-a	聖霊	聖霊論	33	第3の門	指導者訓練：個人伝道	伝道論 乗法繁殖	39 (11%)
D-b	教会とは何か、教会の存在理由	教会論	29	第4の門	聖書	聖書論	23
D-c	弟子の資格	弟子論	17	第5の門	聖霊	聖霊論	25
D-d	肢体とその働き・王のような祭司	霊の賜物、祭司論	13	第6の門	祈り	祈りの目的・方法・実践	18

E-a	小グループの集いとリーダーシップ	組織論	31	第7の門	指導者訓練：養育	伝道論 乘法倍加	20
E-b	聖書の主題と内容	聖書知識	61 (17%)	第8の門	伝道	伝道論 聖書の根拠	18
			合計 364頁	第9の門	従順	従順の意味と 実践	20
				第10の門	キリストと 管理職	時間・能力・ 所有物・経済 の管理	20
				第11の門	聖書概論	聖書知識	21
				第12の門	指導者訓練 ：弟子化筈	組織論 乘法倍加	68 (20%)

以上、サラン教会とヨハン教会の「弟子訓練」テキストを比較してその異同を明らかにしたが、その目的は先述したように、「弟子訓練」という宣教メソッドが教会の教勢伸張をもたらす一方で、「教会のカルト化」の一因にもなっているという主張の根拠を示すためであった。換言すれば、設立当初、サラン教会の「弟子訓練」テキストを用いていたヨハン教会が、自前のテキスト『12の門』を生み出す過程に「教会のカルト化」の一因が認められるのではないかということである。項を改めて、この視点からヨハン教会の「弟子訓練」テキストを検証してみたい。

5. 「弟子訓練」と「教会のカルト化」

いったい何をもって「教会のカルト化」とするかは、なかなか難しい問題をはらんでいる。「カルト」という言葉自体が、様々な意味合いで使用されているからである²⁴⁾。この報告では、日本の学校教育法の他、1995年12月にフランス国民議会で採択されたセクト基準10項目の第6項「多少を問わず反社会的な説教をする」及び第7項「公共の秩序のかく乱をもたらす」と、1999年3月に日本弁護士連合会が公表した「反社会的な宗教活動にかかわる消費者被害等の救済の指針」の第2項(1)「勧誘にあたって、宗教団体等の名称、基本的な教義、信者としての基本的任務（特に献金等や実践活動等）を明らかにしているか」(2)「本人の自由意思を侵害する態度で不安感を極度にあおって、信者になるよう長時間勧めたり、宗教活動を強いて行わせることがないか」を参照し、「弟子訓練」との関わりにおける「教会のカルト化」の指標として次の3点を立てることにする。

- (1) 正体を隠した勧誘（日弁連の指針第2項(1)に抵触）
- (2) 迷惑行為の推奨（フランスのセクト基準第6・7項及び日弁連指針第2項(2)に抵触）

(3) 体罰（学校教育法第11条に抵触）

(1) 正体を隠した勧誘

このような勧誘を教育している痕跡はサラン教会の「弟子訓練」テキストには認められないが、ヨハン教会のそれには明確に認めることができる。すなわち「指導者訓練：個人伝道」と題された「第3の門」の「討議1」における「宿題」として友人への「伝道」の実習が課せられるのだが、その際に次のように話しかけるよう指導されている。

「私は今あるセミナーに参加しています。宿題で、友だちにこの小冊子を読んであげ、どんな意見や考えがあるかを聞いています」²⁵⁾

同じ単元の「討議3」でも同様の教育が繰り返される。

「私はあるゼミナールに参加していますが、そのゼミナールで多くの人々に意義深い人生をもたらした小冊子について勉強しています。あなたにもこの小冊子を紹介させていただきたいのです」²⁶⁾

このような「あるセミナーに参加している」「あるゼミナールに参加している」といった声掛けから、その「セミナー」「ゼミナール」が、宗教団体による信者獲得に特化された「弟子訓練」であることを予想できるだろうか。これが大学のキャンパス内でなされるなら、大学の授業としてのゼミの聞き取り調査と思うのではないだろうか。先述した日弁連の指針第2項(1)に従うならば、このときの声がけは次のようであればならないだろう。

「私は東中野にある宗教法人ヨハン早稲田キリスト教会の信者です。その教会が行っている弟子訓練という教育の一環でこの小冊子を紹介させていただいて云々」

(2) 迷惑行為の推奨

当然のことながら、迷惑行為を直接推奨するような文言をサラン教会、ヨハン教会いずれの「弟子訓練」テキストにも見出すことはできない。しかし、ヨハン教会の「弟子訓練」テキストの著者、金圭東は自伝的著書において「弟子訓練」を受けた筈長（小

グループのリーダー)の模範的な行為として、次のようなエピソードを紹介している。

「私たちの教会の自慢と言えば、小グループのリーダーである筈長たちの献身だ。…(筈長は)所定の弟子訓練と伝道者訓練を受け、信仰者としての均衡のある社会性と情緒、人格などを総合的に判断して任命する。」²⁷⁾

「彼ら(筈長)は、アパートの扉を固く閉めて顔さえ見せない新来者の家を訪ねて扉をたたく…扉を開けようとしたが訪ねて来た人が筈長だということに気付いた筈員(信者)が急いで扉を閉めようとすると、筈長はドアの隙間に素早く足を入れて確保したそのわずかな隙間から話をする」²⁸⁾

「(信者が)一回礼拝をさばると一週間ずっと筈長たちの訪問を受ける」²⁹⁾

「ある筈長は扉を開けてくれない筈員に話をするために周辺の電信柱に登り、窓を叩いた。その熱意に感動した筈員が後に筈長になり、自分が受けたように筈員に愛を施すのを見て私はとても安心した」³⁰⁾

以上、明確に拒否の意思表示をしているのに閉じようとする玄関の扉の隙間につま先を入れて隙間を確保する行為、一週間毎日続く訪問、そして電柱によじ登って窓を叩く行為、これらを「迷惑行為」と呼ぶことに異議はあるまい。そして先述の日弁連指針第2項(2)「本人の自由意思を侵害する態度で不安感を極度にあおって、信者になるよう長時間勧めたり、宗教活動を強いて行わせることがないか」に照らして、その問題性は明白であろう。ヨハン教会の「弟子訓練」を修了したリーダーたちによるこのような行為を金圭東は模範的行為として推奨するのである。「信教の自由」には「信じない自由」も含まれている。金圭東によって推奨されているリーダーの行為は「信じない自由」という意味での「信教の自由」の侵害、つまり人権侵害的行為と言ってもいいのではないだろうか。

(3) 体罰

前項の迷惑行為と同様、体罰についてもこれを肯定するような文言を、サラン教会、ヨハン教会いずれの「弟子訓練」テキストにも見出すことはできない。しかしながら、ヨハン教会の金圭東の自叙伝の「第三部 私の弟子訓練、変わらない牧会のエッセンス」と題された部分に、次のような記述がある。

「私たちの教会で用いられる兄弟、姉妹たちは、叱られるとき、頭を下げることができる。ときにはリーダーが遅刻した場合、壁に向かって手を挙げて立って

るよう言っても、その通りにする。教会の全体の雰囲気が叱られることに対して心を開いている。教職者から指摘を受けると…頭を下げてプライドを捨てる。」³¹⁾

周知のように、日本の学校教育法では、殴る、けるなど身体を侵害する体罰だけでなく、正座・直立など特定の姿勢を長時間保持させることも体罰とみて禁止している³²⁾。その基準から判断するなら「壁に向かって手を挙げて立たせる」という行為は体罰であろう。このような行為を、「教会全体の雰囲気が」許容している（「心を開いている」）と金圭東は言うのだが、このような事態を健全な組織のあり方といえるであろうか。

さらにヨハン教会の「弟子訓練」テキストとの関連で気になるのが、上記引用文中の「頭を下げてプライドを捨てる」という一文である。先にサラン教会の「弟子訓練」テキストに比較して、ヨハン教会のそれにおいてはキリスト教的生活倫理における「従順」「服従」の項目が特化していることを指摘したが、その中に次のような一節がある。

「クリスチャンが実を結ぶためには従順の死が必要です。この死は自尊心の死であり、私たちの特権の死であり、偏見の死であり、野望の死であると言えます。」³³⁾

「神様に従順する人生を生きてください。自我を折ってまで従順できると思いますか。」³⁴⁾

「自尊心の死」「自我を折ってまでの従順」これが先の体罰の文脈で語られた「プライドを折って頭を下げる」と共鳴する教えであることは明らかであろう。このような「従順」「服従」の教えは、サラン教会のテキストには見出せないものであり、ヨハン教会の「弟子訓練」の特異性を示していると言ってよい。これがヨハン教会の「心の芯が変わる弟子訓練」³⁵⁾「心の奥底を変える弟子訓練」³⁶⁾の内容である。

さらにこの関連で、サラン教会の玉漢欽と異なる点として、ヨハン教会の金圭東が軍隊の比喩を多用する点を指摘しておきたい。

「10%の先頭グループが残りの90%の羊の群れを導いていくので、リーダーグループは兵士のように強く育てるべきだ」。

「軍隊のように訓練した少数のリーダーグループ」

「教会には軍隊のような規則があるべきだ。特に90%を導く10%のリーダーグ

ループは軍隊のような規律で厳しく育てるべきだ。そうしないと教会全体が正しく立たない。サタンを先制攻撃できる強い力を育てなければならない」。

いずれもヨハン教会の「弟子訓練」について金圭東が自叙伝で解説している文章である³⁷⁾。サラン教会のテキストでも「少数を精鋭化し、その少数をもって多数を動かす戦略」が「弟子訓練」の本質であると言われてはいたが、軍隊との比喩でこれを積極的に説明してはいない。金圭東はそれとは対照的で、実際、ヨハン教会の「弟子訓練」を見てある人が洩らした批判的な言辞「教会が軍隊の訓練所なのですか」について、彼は「われわれの状況をあまりにも適切に表していて驚いた」と述べて、ヨハン教会の「弟子訓練」と軍事教練との類似を認めている³⁸⁾。

このような訓練組織への入り口が、「私はあるゼミナールに参加しています。そこで多くの人々に意味深い人生をもたらした小冊子について勉強しています。あなたにもこれを紹介させていただきたいのです」というソフトな語り掛けであり、あるいは「ヘブライ文化研究会」「韓日留学生交流会」「聖書と文学」といったダミーサークルであるという異常さ（正体隠しの勧誘）にも再度注意を促しておきたい³⁹⁾。

6. おわりに

以上のような「弟子訓練」の実態が、「弟子訓練」が「教会のカルト化の一因」という判断の根拠である。そして、最後に指摘しておきたいことは、ヨハン教会において認められる「正体隠しの勧誘」「迷惑行為の推奨」「体罰」といった「カルト的要素」を根底で支えているのが、ヨハン教会の「弟子訓練」において特徴的な「乗法繁殖」「乗法倍加」という伝道論だということである。ねずみ算的に信者が増えるというこの伝道論に従えば、信者数が停滞したり、ましてや減少したりすることは理論上あり得ない。もしそういうことが起こるとしたらこの理論の実践者である「弟子たち」が、この理論を忠実に実践していない証拠に他ならないのである。勧誘の声掛けのときになぜ団体名を名乗らないのか、なぜ宗教団体とは無縁の印象を与えるサークルを入り口にするのか、はじめから宗教団体であると知ったら、話を聞いてくれる人、足を運んでくれる人が激減することが目に見えているからである。礼拝の出席者数、受洗者数、そして教会数が増えること、ひいては全世界を福音化すること（全人類をクリスチャンにすること）、これをもって神の計画の実現とする宣教理論が、このような不正行為の温床になっている。このような意味において、「弟子訓練」は「教会のカルト化の一因」となるのである⁴⁰⁾。

注

- 1) 李元範・櫻井義秀〔編著〕『越境する日韓宗教文化—韓国の日系新宗教・日本の韓流キリスト教』北海道大学出版会（2011年）p. 405－406
- 2) ibid. p. 410ff.
- 3) ibid. p. 405
- 4) 常石希望「韓国における初期キリスト教受容の要因（下）」『言語と文化』第19号（愛知大学）p. 63
- 5) ibid. p. 63f.
- 6) ibid. p. 64f.
- 7) ibid. p. 65
- 8) ibid. p. 66f. 澤正彦はネヴィアス方式を「宣教師中心の旧式宣教論に対する土着教会中心の新しい宣教理論である」とし、その骨子を以下の10点にまとめている。(1)宣教師は広範な巡回伝道をすること。(2)聖書中心。(3)すべての信者は同時に伝道者である。(4)教会の自治制度。(5)教会の自給制度。(6)体系的な聖書研究による訓練。(7)厳格な教会規律の制定。(8)他の団体との共同作業の推進。(9)法廷には関わらない。(10)経済的困窮者の救済。澤正彦『南北朝鮮キリスト教史論』日本基督教団出版局 1982年、p. 87f.
- 9) 常石 ibid. p. 68
- 10) ibid. p. 68
- 11) ibid. p. 70
- 12) 玉漢欽（著）／卞在昌（訳）『信徒を目覚めさせよう—弟子訓練テキスト』小牧者訓練会 1990年
- 13) 金圭東『ヨハン早稲田キリスト教会弟子訓練教材12の門』ヨハン出版社 2002年、p. 2
- 14) 李・櫻井 ibid. p. 240
- 15) 玉漢欽 ibid. p. 4
- 16) 金圭東『12の門・基礎』p. 129, 『12の門・養育』p. 66, 『12の門・訓練』p. 110
- 17) 『12の門・基礎』p. 111
- 18) ibid. p. 130
- 19) 『12の門・養育』p. 69
- 20) 『12の門・訓練』p. 110
- 21) ibid. p. 121
- 22) ibid. p. 137
- 23) 卞在昌（著）清水義人（訳）『信徒牧者を育てよう』小牧者出版 1996年、p. 38
- 24) 私見では「カルト」という言葉は現在、次の3つの意味合いで用いられている。(1)虐待的な人間関係一般をあらわす。この意味合いでは「一対一カルト」(one-on-one cult) といった使われ方をする。M. L. Tobias & J. Lalich, “Captive Hearts, Captive Minds”, Hunter House, 1994. p. 18f. (2)「カルト映画」といった用例（『広辞苑』）に代表されるような、少数の熱狂的なファンによって支持されている文化現象を指す。(3)オウム真理教に代表されるような組織的犯罪を犯した反社会的宗教団体。しかし、現実の「カルト」現象においては、こ

れら3つの要素が入り混じっており、明確な線引きは困難である。

- 25) 『12の門・基礎』 p. 117
- 26) *ibid.* p. 121
- 27) 金圭東『主は荒れ野で働かれる』ヨハン出版社 2005年, p. 157
- 28) *ibid.* p. 159
- 29) *ibid.* p. 159
- 30) *ibid.* p. 160
- 31) *ibid.* p. 318
- 32) 体罰を禁じた学校教育法第11条における「体罰」の具体的な内容については文科省通知「問題行動を起こす児童生徒に対する指導について」(18文科初第1019号平成19年2月5日)において、次のように規定されている。「教員等は、児童生徒への指導に当たり、いかなる場合においても、身体に対する侵害(殴る、蹴る等)、肉体的苦痛を与える懲戒(正座・直立等特定の姿勢を長時間保持させる等)である体罰を行ってはならない。体罰による指導により正常な倫理観を養うことはできず、むしろ児童生徒に力による解決への志向を助長させ、いじめや暴力行為などの土壌を生む恐れがあるからである。」
- 33) 『12の門・訓練』 p. 16
- 34) *ibid.*, p. 28
- 35) 金圭東『主は荒れ野で働かれる』 p. 241
- 36) *ibid.*, p. 319
- 37) *ibid.*, p. 233ff.
- 38) *ibid.*, p. 190
- 39) 金圭東は、これらのサークル名を「一年ごとに名前を変えて登録したり」することにより、大学キャンパス内での伝道活動に戦略的に使用していることを認めている。*ibid.*, p. 150-151
- 40) サラン教会の玉漢欽は、近著において「何人集まるかに神経を使うのをやめよう。」「量的成長を狙っての弟子訓練なら、いっそ始めることもするな」と述べて、「乘法繁殖」のような信者数の増加に重点を置いた「弟子訓練」に警鐘を発している。玉漢欽『これが牧会の本質だ』国際弟子訓練院 2009年, p. 82, 107